

大学における保健体育教育が卒業後のライフスタイル及ぼす 影響と効果に関する研究

——スポーツと社会階層に関する先行諸研究の再検討——

市毛 哲夫

東北大学大学院教育学研究科

要約

成人のライフスタイルの選好、特にスポーツ参加は、個人の内的・心理的欲求に基づくものといえる。しかし、他方では、現在の身体的条件（健康かそうでないか、得意か不得意か等）や様々な社会的・経済的条件にも大きく左右される。さらにこれまでの学校体育を中心としたスポーツ経験も大きな要因となろう。本稿では、社会階層という概念に着目し、「スポーツと社会階層」が一つの主要な研究領域となっている欧米のスポーツ社会学者による様々な調査・研究を検討することにより、今回の研究の課題を明確にするとともに、その迫るための手法を模索した。

キーワード：大学体育 スポーツ 健康 ライフスタイル 社会階層

はじめに

戦後の学制改革によって大学に保健体育科目が導入されて 50 年以上の年月が過ぎた。このことはある人が小学校から大学まで進学したとすれば、13年から14年間週に何回かはスポーツを定期的に行い、体を積極的に動かす機会が用意されているということに他ならない。

一般的にスポーツは健康によいとされ、特に成人期においてはいわゆる「生活習慣病」の予防や症状の改善に効果があるといわれている。特に近年、健康志向の高まりをうけて中高年齢層を中心にスポーツを定期的あるいは習慣的に行う人々も増えてきているようである。しかし、これはその必要性や効用から行われているウォーキングや機器を使った軽運動といったものが主体で、楽しみのための自発的かつ継続的なスポーツ参加者は限られた層にとどまっているように思われる。

R.C.マンネルと D.A.クリーバー(2004 p.210)はレジャー研究における「レジャーの社会的文脈」をとらえる中で青年期から成人期への移行の段階で青年期のうちにやめられてしまうレジャー活動の中の典型的な例としてスポーツを挙げている。多くの研究を概観する中で共通してみられる主要な理由として、①過度の勝利重視、②おもしろみの欠如、③他の活動への関心の移行などととも④高いレベルのスキルを獲得することの困難さとその意欲の低下をあげられるとしている。これらは示唆するものも大きい欧米を中心とした研究を概観したものであり、すべてが我が国の現状に適するものであるかはさらに検討す

る必要がある。さらに彼らは、最近になってわずかではあるが青年期から成人期への移行におけるレジャーの役割について検討した研究が見られるようになったが、これまではほとんど見られなかったとしている。また、レジャー行動の変化とライフステージの移行におけるレジャーの役割について検討した研究はきわめて少ないとも述べている。ライフステージの移行に伴うライフスタイルの変化などを総合的にとらえた研究が少ない中で丸山(1990 p.183)は、「ライフスタイルとスポーツ参与」を言及するなかで、余暇行動とは生活構造と生活意識から制約・条件付けられて顕在化した生活行動の一側面であるとしスポーツ参与も一つの余暇行動であり、余暇全般に積極的な人びとはスポーツに対しても積極的であるという傾向があるという見解を示している。

余暇（レジャー）行動としての成人のスポーツ参与は、基本的には各個人の内的・心理的欲求によるものである。しかし他の様々な要因や条件というものも大きく影響しているとも考えられる。

人びとのライフスタイルを決定づけるものとは何かという、基本的な課題がここで浮上してくる。そこで体育・スポーツの社会学的研究において比較的蓄積が多いと思われる「スポーツと社会階層(Social Stratification)」に関する諸研究を概観することにしたい。なぜならば、スポーツ参与を現実的に規定する条件である社会・経済的要因、すなわち社会階層の問題を関連づけて把握しなければライフスタイルやレジャー行動としてのスポーツ参与の総合的な理解が深まらなないと考えられるからである。

スポーツと社会階層に関する先行研究の検討

1. 先行研究にみられる基本的視点

1960年代から1980年代まで、「スポーツと社会階層」というテーマは欧米、特に北米におけるスポーツ社会学研究者の主要な関心事となっていた。そのため数多くの調査・研究が行われている。これらの調査・研究で使用されている用語としては、「階級」「成層」「階層」など多様なものが含まれている。しかし、その論旨を吟味すると多くは「階層(Stratification)とスポーツ」に収れんされるようである。そこで本稿では特別な場合を除いて、「階層」という用語に統一して先行研究を検討することとする。

これまでの研究の基本的視点を概括してみると、大別して二つの研究アプローチに分類することが可能であると思われる。その一つは機能主義的解釈であり、他方は闘争論的解釈である。

機能主義的アプローチによる代表的研究には、Lüschen(1967)、Gruneau(1975)、Loy(1978)等のものがあり以下のように要約される。

- (1) スポーツは社会的価値を反映し、社会における統合と維持の機能を果たす。
- (2) スポーツはある社会の社会階層構造を強化する機能をもつ。
- (3) スポーツへの参加は社会移動を達成する一つの方法である。スポーツにおける高

い業績は価値ある物財の所有、そして非物質的価値の支配というような永続性のある基準を基盤とする地位への参入を可能にする。

という内容を含むものである。

また、闘争論的にアプローチした代表的研究には、Gruneau(1975)、Loy, McPherson, & Kenyon(1978)等のものがあり、以下のように要約される。

- (1) スポーツは社会における経済的下部構造を表示し、ブルジュアの精神を教えこむ。
- (2) スポーツは社会における富と権力の不平等な分配を反映し補強する。
- (3) スポーツはテクノクラティックな文化の手段的、官僚制的、エリート階級社会的側面と見ることができる。
- (4) スポーツ参加は人間の疎外された労働の形態を表示する。

という内容が含まれている。

これらは、「スポーツと社会階層」の問題をマクロに捉えた理論的研究ということができよう。これらの他に、よりミクロなレベルで実証的にスポーツと社会階層の問題を考察したものがある。以下では、それらを各サブ・テーマごとに概観することにしたい。

2. 社会階層とスポーツ種目

1) エリート競技者にみられる社会階層

このカテゴリーの調査・研究は、主に大学対抗レベルの競技者の社会的・経済的背景を扱っている。その代表的なものとしては、Loy(1969,1972)、Berryman & Loy(1976)等の研究がある。これらの研究は主として競技者の出身階層と競技種目との関連を見いだそうとするものである。それらは次のように要約されよう。

- ・ ボクシング、レスリング・・・主として下層の出身者。
- ・ テニス、スキー、ゴルフ、ボート・・・主として上層の出身者。
- ・ その他のスポーツ・・・中層の出身者が圧倒的に多いが、あらゆる階層からの出身者を含んでいる。

としている。

また、Gruneau(1972)はカナダの冬季ゲームの競技者を調査し、以下のようなことを見いだしている。すなわち、

- (1) あらゆる階層の出身者を含んでいるが、upper-middle と upper 層が圧倒的に多い。
- (2) この傾向は女性競技者場合により明らかである。
- (3) 個人スポーツの方が社会・経済尺度を重視する傾向がある。
- (4) スポーツの民主化が進めば、階層的には下降の傾向が生ずるであろう。

以上は、競技者レベルを対象としたものであり、その意味では特殊な事例といえるだろう。

次に、一般大衆を取り扱った調査・研究に目を向けてみたい。

2) 社会階層とスポーツへの大衆参加

ここでは、大衆あるいはサブ・エリート的一次的および二次的スポーツ参与のパターンにみられる階層的な相違に関する研究について言及したい。

代表的な研究としては、Stone(1969)の研究をあげることができ、そこではどの階層の人びとがどのようなスポーツに参加しているかということが示されている。それによると、

- ・ 上層は、ホッケー、ゴルフ、テニスに、
- ・ 中層は、フットボール、野球、ボーリング、狩猟に、そして
- ・ 下層は、闘技スポーツ（ボクシング、レスリング）に

参加しているとしている。

また、Noe(1974)は1900年から1960年までに発行された4つの雑誌の内容を分析し、レジャーの生活様式はその質・量ともに社会階層によって明らかに異なっており、特にlower-middleはupperやupper-middleに比較してスポーツをレジャーとして広範囲の利用していることを見いだしている。

また、Kenyon(1966)は二次的スポーツ参与にみられる階層的相違に着目して次のように述べている。

- (1) 有意な差はないが、下層はより高い階層に比較してスポーツ・イベントへの参加者（直接的な消費者）は少ない。
- (2) 競馬、レスリング、ボクシングを除いて、スポーツ・イベントへの参加者は主にmiddle以上の階層である。
- (3) テレビによる間接的な二次的参与はあらゆる階層で行われている。

等である。

さらに、成人のアマチュア・スポーツ集団のリーダーを対象とした研究もある。その中で、Bratton(1970)はカナダの水泳およびバレーボール協会の役員について調査し、水泳はより高い階層の出身者が多いとしている。また、McPherson(1978)は、ホッケーのボランティア・コーチの背景についてアメリカとカナダとの比較調査をおこない、アメリカのコーチのほうがカナダのコーチよりも高い階層の出身であることを見いだしている。同様なものとして、Beamish(1976)はカナダの全国的スポーツ団体の役員について調査した結果、その70%の人びとが過去にプロと関係していたこと、そして、そのほとんどが中流階層の出身であることを明らかにした。

これまでみてきたように、欧米においては様々な角度から「スポーツと社会階層」について調査・研究がなされてきた。しかし、社会階層をどのような基準あるいは属性から特定化するかという、いわば階層それ自体の捉え方に不明瞭な点が多いことに気づかされる。

そこで次に、社会階層を決定すると考えられる、いくつかの指標とスポーツ参与についての調査・研究をみていくことにする。

3) 社会的地位とスポーツ参与

社会階層の分析単位は社会的地位である。個人の社会的地位は複数の地位構成要因からなる多次元的な概念であるとされている。以下では、いくつかの地位変数と考えられる項目とスポーツ(参与)との関連について論及した調査・研究について取り上げていきたい。

4) 職業とスポーツ参与について

Berge(1969)は North-Hatt 尺度による職業威信によって階層を分類し、それとレジャー活動への参与との関連について考察している。そこでは、職業威信は次の4つに分類されている。

- (1) 専門そして高いレベルの管理職
- (2) 上記以外にホワイト・カラー労働者
- (3) 熟練労働者
- (4) 非熟練労働者

である。Berge はこれらを独立変数、レジャー活動を従属変数として捉え、スポーツ活動を「参加」と「観客」との二つに分けて、以下のような結果を導き出した。すなわち、職業威信(1)(2)のカテゴリーに所属する人びとは高いレベルでスポーツに「参加」していること。また、16のスポーツ活動について(1)のカテゴリーの人びとは個人スポーツに、(3)の人びとはチーム・スポーツに参加し、(2)に所属する人びとは個人とチームそれぞれに、(4)の人びとは「参加」していないという結果を得た。また、スポーツ・イベントへの「参加」についても(1)のカテゴリーの人びとが多く、(2)、(3)、(4)の順に少なくなる傾向にあるとしている。

5) 所得(収入)とスポーツ参与について

これに関して、The Outdoor Recreation Resources Review Commission は1960年代のはじめには早くも総収入(所得)と野外活動およびスポーツ活動への参加には一定の関係があると報告している。また、Lüschen(1969)、Grunau(1975)等は、所得からみてセーリング、乗馬、テニス、ゴルフは upper-middle のスポーツであり、ボクシングやサイクリングは lower のスポーツであると結論付けている。

Stone(1969)も同様の結果をえており、ゴルフ、スキー、水泳、テニスは高い階層に、野球、ボクシング、レスリング、ボーリングは低い階層に見られるとしている。しかしながら、フットボール、バスケットボール、ホッケーは階層には無関係であるとも述べている。

Curry & Jiobu(1984)もまた、収入(所得)は階層を決定する重要な要因であるとして、同様の見解を述べている。すなわち、スポーツと費用との関係から、金持ちはヨット、ボロを、upper-middle はアイス・スケート、ゴルフ、テニスを、そしてより収入の低い集団では低コストのスポーツをそれぞれ行ってきたとしている。

6) 学歴とスポーツ参与について

学歴との関連については、特にイギリスのグラマー・スクール出身者はパブリック・スクール出身者に比べて、オックスフォードやケンブリッジ等の大学におけるクリケットやラグビーのチームで不利になっていることがエッグルストン, J (1988)によって報告されているとともに、Berrman & Loy(1976)によればハーバードやエール大学の競技チームの中では、バスケットボールを除き、プライベート・スクール出身者が圧倒的に多いという調査の結果が報告されている。

7) 年齢層とスポーツ参与について

Dumazedier(1973)は学齢から30歳までの間にスポーツ活動への参加率は80%から13%に減少すること、さらにこの減少率は専門職についている男性に比較して、女性では2倍に、労働者層では3倍になると報告している。また、Milton(1975)はカナダ人40,000人以上について調査した結果、定期的スポーツ活動への参加は年齢と反比例すること明らかにしたが、ここでも男性の高学歴層では高い参加率となっていることを報告している。

8) 階層としての性とスポーツ参与について

歴史的にみた場合、女性はスポーツへの参加あるいは消費（視聴等）において、禁止や妨げを受けてきたということは否めない事実である。このような観点から、Milton(1975)やHall(1976)は、現代においてもあらゆる年齢層で女性はスポーツへの参加の頻度とその数で男性に劣ることを報告している。特に、Hallは成人女性のスポーツ参加に影響を与える因子として、若いころの活動レベル、既婚者であればその家族のスポーツへの関心の強さと協力の程度をあげている。

9) 社会移動とスポーツ

次に、やや視点を変え「社会移動とスポーツ」を扱った研究をみていきたい。スポーツ・システム内での移動のメカニズムを検討する中でLoy(1969)は積極的なスポーツ参加が上昇移動を促進する方法であり、それは以下のようなことから指摘できるとしている。すなわち、

- (1) スポーツ・スキルの上達によるプロ・スポーツへの加入
- (2) 協議奨学金の受領と、それによる教育の拡大
- (3) 雇用や昇進での特別待遇による「職業的保証」

(4) 実社会で重要とされる態度や行動パターン（達成志向、リーダーシップ特性）の学習等である。また、Lüschen(1981)も同様の結果を得ているが、移動の可能性はスポーツそのものよりもむしろ教育システムとの関連によると述べている。これと同様な見解を示した研究には、Snyder & Spreitzer(1983)、Curry & Jobu(1984)等がある。したがって、スポーツ

による上昇的な社会移動に関しては、Gruneau(1975)、Eitzen(1982)等が述べるように、今日では「神話」かあるいは極めて稀なことであり、また方法論的・概念的な弱さから経験的には検証されず、否定される傾向にあるといえよう。

これまで「スポーツと社会階層」に関する様々な調査・研究について概観してきたが、社会階層の捉え方が不明確であるものや、一部の階層決定因子とスポーツとの関連を捉えたものがそのほとんどであった。

今回の研究では、日本の階層構造を総合的に把握しようとした社会調査であるSSM(Social Stratification and Social Mobility)調査を参考に、社会階層を決定する因子として、職業、所得、学歴、生活様式といった指標を用いることとする。さらに、医学系研究科教員によるスポーツ活動と健康に関する疫学的調査と融合させ、成人のライフスタイルと大学における体育・スポーツの関係をより立体的に提示したいと考えている。調査・分析についてはについては現在続行中であり、ここでは具体的に示すことはできないがなるべく早い時期に公表できるようにしたいと思っている。

文献

Beamish,R.(1976)

An Analysis of the Composition of the National Executives of Selected Amateur Sports: A Median Perspective. Queen's University.

Berryman,G., & J.W.Loy(1976)

Secondary schools and Ivy League letters: A comparative replication of Egglestone's 'Oxbridge Blue. The British Journal of Sociology. 27.pp.61-77

Bratton,R.(1970)

Demographic characteristics of executive members of two Canadian Association of Health. Physical Education and Recreation. 37.pp.20-28

Burdge,R.(1974)

Levels of occupational prestige and leisure activity. Sport and American Society.G.Sage(ed) Reading,Addison-Wesly.

Curry,T.J. and R.M.Jiobu(1984)

Social class and social mobility. Sport-A Social Perspective. pp.65-86. New Jersey. Printice-Hall.

Dumazedier,J(1973)

Report to a symposium on sport and age. O.Grupe et al(eds) Sport in Modern World-Chances and Problems. pp.198-199. New York. Springer-Verlag.

Eitzen,D.S. and G.H.Sage(1982)

Sport,social stratification, and social mobility. Sociology of American Sport. 2nd. ed. pp.256-291.

エッグルストン, J (1988)

スポーツと文化・社会 ロイ, J., ケニヨン, G., マックファーソン, B. 編著 桑野豊編訳
第4章 中等学校とオックスブリッジ・ブルー pp.490-501 ベースボールマガジン社
Gruneau, R.S. (1972)

A socio-economic analysis of the competitors of the 1971 Canada winter games. Univ. of
Calgary.

Gruneau, R.S. (1975)

Sport, social differentiation and social inequality. D. Ball & J. Loy (eds). Sport and the Social
Order. pp.121-184. Reading. Addison-Wesley.

Hall, M.A. (1976)

Sport and physical activity in the lives of Canadian women. R.S. Gruneau et al (eds). Canadian
Sport: Sociological Perspectives. pp.170-199. Ontario. Addison-Wesley.

Kenyon, G.S. (1966)

The significance of physical activity as function of age, sex, education, and socio-economic status
of northern United States adults. I.R.S.S. 1. pp.41-59.

Loy, J.W. (1969)

The study of sport and social mobility. G.S. Kenyon (ed.). Aspects of Contemporary Sport
Sociology. pp.101-119. Chicago. The Athletic Institute.

Loy, J.W. (1972)

Social origins and occupational mobility of a selected sample of American athletes. I.R.S.S.
7. pp.5-23.

Loy, J.W. et al. (1978)

Institutionalized structures of social stratification. Sport and Social Systems. pp.332-376.
Reading. Addison-Wesley.

Lüschen, G. (1967)

The sociology of Sport: A trend report and bibliography. Current Sociology. 15-3. pp.5-40

Lüschen, G. (1969)

Social stratification and mobility among young sportsmen. J. Loy and G. Kenyon (eds.).
Sport, Culture and Society. pp.258-276. New York. MacMillan.

Lüschen, G. (1981)

The system of sport-problems of methodology, conflict and social stratification. G.H. Sage (ed.)
Handbook of Social Science of Sport. pp.197-213. Stipes. Illinois.

マンネル, C.R./クレーバー, D.A. (2004)

レジャーの社会心理学 速水敏彦監訳 第8章「社会化とレジャー志向の発達」 p.210 世
界思想社

丸山富夫(1990)

スポーツ社会学への招待 菅原禮編著 第6章「社会階層とスポーツ」 p.183 不昧堂出版

Milton,B.G.(1975)

Social status and leisure time activities: National Survey Findings for Adult Canadians. Canadian Sociology and Anthropology Association Monograph Series.

Noe,F.(1974)

Leisure life styles and social class: A trend analysis, 1900-1960. Sociology and Social Research. 58,pp.286-294.

Stone,G.P.(1969)

Some meanings of American sport: A extended view. G.S.Kenyon(ed.). Aspects of Contemporary Sport Sociology. pp.5-16. The Athletic Institute.

Snyder,E.E. and E.A.Spretzer(1983)

Social stratification and sport. Social Aspects of Sport. 2nd ed. pp.139-154. Prentice-Hall.

〈付記〉

本研究は、東北大学大学院教育学研究科教育ネットワーク研究室、先端的プロジェクト型研究（A型）の補助を受けた。